

在日ムスリム留学生の宗教的葛藤と留学生支援

市嶋典子（秋田大学）

1. はじめに

本発表では、日本社会における、ムスリム留学生のコミュニティの実態、留学生活における葛藤や困難を明らかにし、留学生支援のあり方を提言する。

1980 年代中頃から、留学や就労目的で来日するイスラム圏の外国人が増加した。店田 (2013) は、日本のムスリム人口は、2011 年現在、約 11 万人にのぼり、着実に「ムスリム・コミュニティ」が根付きつつあると指摘している。注目すべきは、それに伴い新たな問題が発生している点である。例えば、ムスリムは、ハラール食材を必要とするが、そうした食材を扱う店は日本ではほとんど見られない。また、在日ムスリムの宗教的価値観の違いによるストレスや、異文化葛藤の問題も指摘されている (井上 1999)。大学においても、中近東諸国からの政府派遣留学生の受け入れに伴い、ムスリム留学生の在籍数が増加したが、宗教的ニーズに配慮した留学生支援に関する研究は少なく、彼ら・彼女らへのケアが十分ではないことが問題点として指摘されている (岸田 2009)。

一口にムスリムと行っても、実際には、多様な民族・文化集団から構成されており、複雑性を有している。服部 (2008) は、イスラム教は、国家・政治体制や伝統文化の影響を受けながら発展を遂げており、地域ごとに相違点も多いこと、宗教的義務の実践についての見解も、政府、宗派、個人によって相当に異なることを指摘している。サイド (1993) は、「オリエンタリズム」を「「東洋」と (しばしば)「西洋」とされるもののあいだに設けられた存在論的・認識論的区別にもとづく思考様式」(p20) と定義し、「西洋」が固定的なイメージやアイデンティティを「東洋」に付与する構造を問題としている。日本社会においても、ムスリムという異質性を帯びた存在は「他者化」され、固定的なイメージが付与されやすい。実際に留学生教育、日本語教育の分野のムスリム留学生に関する研究においては、ムスリムの多様性、複雑性、個別性が考慮されないまま宗教的特徴が把握され、イメージ調査が行われてきた。また、彼ら・彼女ら一人一人が日本社会において、どのような困難や葛藤を抱え、いかに乗り越えてきたか、また、どのような支援を必要としているのかは、ほとんど顧みられてこなかった。

秋田大学は、国際的人材の育成を目標の一つとして掲げ、外国人留学生 200 名の受け入

れ達成を目指してきた（秋田大学国際戦略 2011）。現在、大学には、209 名の留学生在籍しており、その目標を達成することができたが、留学生受け入れに伴い、様々な問題が浮上してきた。その中の 1 つに、留学生の宗教的多様性への対応が挙げられる。秋田大学には、マレーシアからの留学生在籍している。彼ら・彼女らの多くは、学部や大学院で学ぶムスリム留学生である。インドネシア、エジプト、アフガニスタン、バングラディッシュからのムスリム留学生を含めると、秋田大学には 40 名以上のムスリム留学生在籍している。現在、留学生の受け入れ体制の充実が喫緊の課題とされているが、ムスリム留学生の生活や宗教的多様性に配慮した受け入れ体制が十分に確立されているとは言い難い。

発表者は、秋田大学において、留学生の受け入れ体制整備を行う中で、多くのムスリム留学生在籍が宗教的葛藤に直面していることを知り、宗教的価値観に配慮した留学生支援、大学内や地域社会におけるムスリム留学生への不理解の解消が必要であると実感した。そこで、ムスリム留学生への聞き取り調査を行い、彼ら・彼女らが日本社会において、どのようなコミュニティを形成しているのか、さらに宗教的価値観と生活での困難がどのような関係を持っているのかを考察し、留学生支援のあり方を模索することとした。

2. 調査方法

2.1 調査協力者

2013 年 9 月～2014 年 1 月に、秋田大学のムスリム留学生（学部生、大学院生、教員研修生）6 名に聞き取り調査を実施した。以下、事例で示した学生¹については、A～E と記載する。

A：インドネシア，女性，日本滞在 1 年半， B：マレーシア，女性，日本滞在 3 年， C：マレーシア，男性，日本滞在 4 年， D：マレーシア，男性，日本滞在 4 年， E：アフガニスタン，男性，日本滞在 1 年

2.2 調査方法

調査協力者 6 名に対して、半構造化インタビュー（日本語，適宜，英語使用）を各 1～

1 紙幅の都合上、事例には提示しなかったが、エジプトからのムスリム留学生（男性，日本滞在 1 年半）もインタビューに協力してくれた。

1.5 時間程度行った。主な質問内容は、「現在、ムスリム留学生のコミュニティがあるのか。あるとすれば、それはどのようなものか」「生活の中でどのような困難や問題を抱えているのか」、「困難や問題にどう対処しているのか」である。さらに、インタビューの結果、明らかになった問題点を解決する為に、国際課の事務職員の協力を得て、関係部署と連絡を取りながら、実践を構築した。

3. 分析結果

3.1 ムスリム留学生のコミュニティ

インタビューの結果、ムスリム留学生の密なコミュニティが形成されていることが明らかになった。ムスリム留学生達は、リーダーを選出し、ゆるやかにコミュニティを統制していた。また、サークルとして部室を確保しており、部室を金曜日の礼拝の場所として利用していることが分った。この部室は、情報交換のための場として機能していた。さらに、車を共同購入・利用することによって、ネットワークを強化していた。また、フェイスブックも利用して情報交換をし、ネットワークを拡張していることが分った。以下にこれらの代表的な事例を示す。

【リーダーによるゆるやかな統制】

C：(前略) リーダーは、イベントを計画して、お知らせしたり、例えば、みんなでお花見やバーベキューがあるとか、予定を知らせます。あと、大使館の連絡係もしています。

市嶋：えー、すごいですね。で、リーダーはどうやって決めますか？

C：えー、選挙で決めます。まず、推薦があって、その後、選挙しますね。サブリーダーも。(中略) リーダーは、そんなに大変じゃないです。ただ、何かあったらなんとなくまとめることします。

【礼拝場での情報交換】

A：あ、実は、狭いけど、部室があって、えー、そこで金曜日にお祈りできます。あの一、部室は、サークルとして大学にリーダーが出して、えー、それで、場所をもらいました。そこで、男の人がお祈りしています。(中略) ここで、いろんな人に出て、で、情報をあげたりもらったりします。

【車の共同購入・共同利用によるネットワークの強化】

C：みんなでお金を出しあって、あの、古い車を一台、買いました。スキーとか温泉とか、えー、遠いところに行く時、借りて、使います。だいたい、グループで。新入生が来

たら、色々なところに連れて行ってあげますね、そう。

市嶋：えっ、車があるんですか？

C：はい、みんなで使うための車です。いろんな人

【フェイスブックによるネットワークの拡張】

A：(前略) 秋田のムスリムの学生のフェイスブックがあつて、そこに分からないことがあつたら、なんでも聞きます。すぐに返事があります。あん、このレストランは、ハラールフードあるよ、金曜日のお祈りの場所とか、イベントがあるよ、なんでも知らせます。ここで、新しい知合いもできますね。

3.2 生活における困難や問題

ムスリム留学生達は、ハラールフード入手の困難、日本人の宗教についての評価の回避、不理解を問題としてとらえていたことが明らかになった。このような問題意識は、日本滞在歴が長い学生ほど、強くなる傾向があつた。

【ハラールフード入手の困難】

E:ハラールの食べ物、難しいです。これ、私、あります(ハラールフードの掲載されたリスト表を見せる)これ、スーパーで聞きます。でも、だいたい分からないです。でも、Aさんが always advice me so 大丈夫です。

【宗教的価値観に対する評価の回避】

B:日本人は、だいたいみんな親切です。でも、本当に仲良くなるのは難しいかな。宗教のことも、日本人は、イスラム教、宗教について話すの、タブーみたいな感じがあつて…

【宗教的多様性、個別性への不理解】

D：イスラム教のイメージが、お酒を飲まないとか、豚肉食べないとか、厳しい宗教とかあるみたいだけど、とても簡単なイメージ。人によって、違う。全然違う。もっと、いろいろ、いろいろあります。でも、多分、多分、日本人のイメージは、だいたい同じです。新しいイメージをつくるチャンスがないですから。

3.3 問題の解決案

ムスリム留学生達は、現在のムスリムコミュニティを維持しつつ、日本人コミュニティにもより深くコミットし、コミュニティを相互連関させることが必要であると考えていることがうかがえる。

【コミュニティの維持・拡張】

D：今は、ムスリムのコミュニティがあるから、そこで問題が解決できます。友達もいる

から、寂しくないです。でも、日本に留学したから、もっと日本人と深い関係になりたいんです。なんか、研究室の日本人の友達もいるけど、なんか、そんなに深くない。ムスリムのコミュニティは家族という感じ。とても大切です。それを守って、でも、それだけじゃなくて、ひろ、つなぐ、広くする？つなぐといいかな。境を低くして、どんどん。

4. ムスリム留学生支援のための実践の構築

聞き取り調査によって明らかになったムスリム留学生の抱える問題を改善するために、問題の当事者である彼ら・彼女らとともに実践を模索した。レヴィン（1954）は、アクションリサーチは、社会行動の諸形式の生ずる条件とその結果との比較研究であり、社会行動へと導いていく理論であると述べている。また、パーカーは、「あらゆるリサーチ（研究）はアクション（実践）である」（p173）と述べ、「アクションリサーチとは、研究活動を未来構想的な政治的实践へと変革する活動である」（p174）と述べている。市嶋（2014）は、日本語教育の分野において、従来の授業を対象とした「実践研究」に加え、制度の理念構築や制度の改善へと発展させるアクションリサーチの視座を持つ「実践研究」も重要であると指摘している。問題に直面する当事者であるムスリム留学生と共に環境改善や改革を目指したという点で、本研究は、アクションリサーチの視座を持った「実践研究」と言える。具体的には、現在、発表者、ムスリム留学生、国際課の事務職員と協働で、食堂へのハラールフード導入を目指し、近隣大学の食堂を視察し、生協の担当者との対話の場を設けることになった。また、学生主導で、ハラールフードを紹介するポスターを作成し、日本語で大学内外に発信することになっている。このように、ハラールフードを導入し、紹介する実践を通して、ムスリム留学生の食環境の改善や、大学や地域社会におけるムスリムという「異質性」への理解・承認を目指していく。これらは、秋田大学のムスリム学生、教員、国際課職員、生協担当者のみならず、他大学の関係者も巻き込んだ実践であり、実践の環を幾重にも拡張させていく点が特徴である。日本語教育の教員としては、それぞれの環を繋ぐための言語活動の支援が重要になる。

2008年1月、政府により「留学生30万人計画」が発表され、より多様な地域からの留学生受け入れが想定される今日、留学生の宗教的多様性への対応をより現実的に検討すべき段階に来ている。インタビューの結果、ムスリム留学生達は、様々な問題に直面しながらも、独自のコミュニティを形成し、自助努力、相互扶助の思想を持って、留学生生活を維

持してきたことが明らかになった。一方で、日本人、日本社会とのより深い関係性を構築することも望んでいた。関係性構築のためには、ムスリムコミュニティの中で関係を収束させず、コミュニティを拡張していくことが必要になる。その結び目を作ることが留学生支援の重要な役割になると考える。一番の問題は、お互いを知らないということから生まれる偏見や誤解である。それらを解くためには、関わり合いの場が必要になる。関わり合いを通してこそ、多様性、個別性が浮かび上がり、お互いのイメージが刷新されていく。さらに、新たなコミュニティの環が生成されていくことにもなろう。ムスリム留学生の声を大学や地域に向けて発信するツールや、様々なコミュニティと関わり合える場を構築すること、そのための言語活動の支援が留学生支援の大きな役割であると考えられる。

【参考文献】

- 秋田大学国際戦略 (2011) 〈http://www.pcix.akita-u.ac.jp/inter/in_outline.html〉
- 市嶋典子 (2014) 『日本語教育における評価と「実践研究」－対話的アセスメント：価値の衝突と共有のプロセス』 ココ出版
- 井上晶子 (1999) 「アジア系ムスリム就労者のストレス対処－バングラディッシュ・パキスタン・イラン出身男性を対象に－」 『東京大学大学院教育学研究科紀要』 39, 256-264
- 岸田由美 (2009) 「留学生の宗教的多様性への対処に関する研究：イスラム教徒の事例を通して」 『2007-2008 年度科学研究費補助金 若手研究 (B) 研究成果報告書』 1-50
- サイード・W・エドワード (1993) 『オリエンタリズム』 上 (今沢紀子訳, 板垣雄三・杉田英明監修) 平凡社 (平凡社ライブラリー)
- 店田廣文 (2013) 「世界と日本のムスリム人口」 『人間科学研究』 第 26 巻第 1 号, 29-39
- 服部美奈 (2008) 「日本で育つムスリム児童の教育－愛知県の事例」 『アジア遊学』 117, 145-151
- パーカー・イアン (2008) 『ラディカル質的心理学 アクションリサーチ入門』 (八ツ塚一郎訳) ナカニシヤ出版
- レヴィン, K. (1954) 「社会的葛藤の解決－グループダイナミックス論文集－」 (末永俊郎訳) 東京創元社

【付記】 本研究は、「実践研究理論構築のための調査研究——実践と教育制度との関係をはかりに」科学研究費補助金 (若手研究 B, 24720227) の成果の一部である。